

熊野古道における環境の感性的特徴について

Kansei Features had Environment of Kumano Ancient Road

○中森志穂（筑波大学人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻）

蓮見孝（筑波大学人間総合科学研究科 芸術学専攻）

山中敏正（筑波大学人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻）

・はじめに

平成16年7月7日に世界遺産リストに登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる「熊野古道」は古来より多くの人々を惹き付けて来た。「熊野古道」にまつわる様々な文献の中には、「悟り」などスピリチュアリティに関連するものがいくつも見いだされており、また、「熊野」の成り立ちや、アイデンティティにも深く宗教的要素が関わっている。「熊野古道」の魅力として発揮されて来たスピリチュアリティの構造を研究する事によって、新たな環境的（デザインの）構成要素の発見があるのではないかと考える。

・トランスパーソナル心理学

研究を進めるにあたって、スピリチュアリティをその研究領域とするトランスパーソナル心理学を取り上げた。スピリチュアリティに関連する印象体験としてトランスパーソナル体験と基準とした。R・ウォルシュとF・ヴォーンによるトランスパーソナル体験の定義では、「自己やアイデンティティの感覚が、個人的なものを超えて、人類、生命、精神、宇宙のより広い諸側面を含むものへと広がる体験（Walsh and Vaughan, 1993）」とある。

・実験、調査

<材料>

「熊野古道」の一部である、「熊野古道波田須道」を実際に歩行する状態で映像として記録し刺激映像として実験に用いた。「熊野古道波田須道」は比較的短く、また、現存する「熊野古道」の中で最も古い道であること、さらに、現在人々の住む集落から入り、地藏や石垣、熊野古道の特徴である石段が見える路を通るなど途切れのない編の映像の中でも比較的しやすい情景が準備できるなどの観点から採用した。この映像を20秒ごとに切断し26のシーンに分けた。各シーンの始まりの部分を静止画像として用意した。

<被験者>21歳～24歳の大学生13名（男5名、女7名）

<実験1>刺激映像を8分間見ながら口頭で自由な印象評価を行わせ、発話を記録した。

<実験2>静止画像を見せ、注意のいったものを数点、口頭で自由に述べさせ筆記で記録した。各シーンの構成要素の抽出を目的とする。

・解析、考察

実験2で採取した構成要素を集計したところ、1シーンにつき平均23.1件、合計601件の回答が得られ、65項目に分類した。そのうち回答数が3以下の8項目を除いて、57項目について主成分分析を行った。結果、第20主成分までの固有値が1以上であり、また累積寄与率が94.57%であったため、第20主成分までを熊野古道の環境特性を表す

軸と決定した。

ついで実験1で採取した発話をジェームズ・スワンが行った「聖地でのトランスパーソナル体験分類」に基づいて分類した。

（聖地でのトランスパーソナル体験分類／(1)自然や特別の場所との調和的な結びつき(2)至福、畏怖、驚異の感情(3)幻視（ヴィジョン）を呼びおこす(4)異種間のコミュニケーションと協力(5)鮮明な夢(6)異常な音が聞こえたり、匂いがしたりする(7)先祖の記憶を想起する(8)自然の諸要素との融合）全発話、計986件のうち224件がトランスパーソナル体験に該当した。内訳は(1)53件、(2)91件、(3)26件、(4)1件、(5)4件、(6)2件、(7)44件、(8)3件であった。この発言を1件につき1得点としてシーンごとに合計し、トランスパーソナル体験得点とした。これを従属変数とし、先に行った主成分を説明変数として重回帰分析を用いて解析した。この結果決定係数は0.69と高い数値が得られた。偏相関係数をもとに影響力の高い順に主成分の解釈を解釈すると「奥に曲がって繋がる(18)」「過剰な手入れがされていない(12)」「非人工的(1)」「隠れた意味のありそうな(3)」「囲まれている感(11)」（括弧内数字は主成分の順番）であり、トランスパーソナル体験に対してプラスに働いていると考えられた。図1は「奥に曲がって繋がる」、図2は「過剰な手入れがされていない」、図3は「非人工的」の代表的シーンである。



図1



図2

図3